

婦人の娛樂及び教育に就て

江原素六

現今の婦人が果して娛樂なるものを有するや否やは頗る疑はしい問題である。又婦人の娛樂にして、社會上の必要より求むるものならば格別弊害があるまいと思ふけれども、之に反して一個人が一時の快樂を目的とするものに至りては、無益若くは有害なものが往々見えるやうだ。例へば芝居見物とか、花骨牌とか云ふ如き種類のものは、婦人の娛樂として果して効力あるや否やは不明である。眞に興味を有する所の娛樂は、婦人の性情の上に非常なる慰藉感化を與へて、其活動發展を資くる効驗多きに止まらず、道徳の修養上にも深大なる感化を與ふるものである。單に美衣を纏はんことを望み、滋味を食せんことを求め、自己一時の感情を満足せしむるだけの事ならば、其娛樂が果し

で婦人の性情を向上發展せしめ得べきや否やは疑問で、時としては却つて奢侈遊情に陥らしむる弊を生ぜぬとも限らぬと思ふ。演劇等を見物に行くため、徒に着飾りに苦心するといふ様な事では、娛樂を求めて終に娛樂の趣旨に反する事となるであらう。娛樂にして眞誠なる興味を有する娛樂ならば、之が人の性情の上は偉大且つ善良なる感化慰安を與へて、その精神常に撫々として、或は僕婢に對するにも、或は世人に對するにも、其他總ての事物に對するにも、常に愛と美とを備ふることが出来るものだ。彼の芝居見物に行くために、準備の仕方が悪いとか何とか云つて僕婢を叱責するが如き人物は、娛樂の何たるを解するものではない。

讀者諸子の如きは、夙に知つて居らるゝ所ならんが、彼の有名なる碩學貝原益軒を愛して居つた人である。然るに或日塾生が角瓶を取つて居る間に、誤つて先生の尤も大切にして居る

牡丹の枝を折つた。是に於いて塾生等は大に懼れいかにして罪を先生に謝すべしか、殆ど策の施すべき所を知らなかつた。で熟議の末、遂に隣人に頼んで先生へ詫ぶる事に決し、不取敢事の由を隣人に話して頼んだ、隣人も之は容易に肯うてくれなかつたけれども、再三懇請の上、漸くの事で承諾を得た。依て其隣人は旨を齎らして先生を訪ひ事の次第を備に語りつゝ塾生に代りて謝罪したるに、意外にも益軒先生は温容些も平生に異ならず莞爾として隣人に向ひ、牡丹は楽しむ爲に愛するので、惱る爲に培ふものに非ざれば、過失に依り枝を折りたりとて、毫も配慮するに及ばぬと言はれたさうだ。此事は誠に娛樂に關する絶好の教訓ではあるまいか。世間には態々朋友环を招きて饗應し、相樂まんとする時分に、無遠慮にも家族に對し小言を云つたり怒つたりする人が往々あるが此等は折角の娛樂をくだらぬ事のために犠牲とする所爲なれば、心ある人は深く戒慎を加ふべきである。

今日女學校に於いて育兒法とか、家政學とか、その他種々なる學藝をいかに多量教ふるとも、若し其女子にして愛と美との徳が平均に具備し居らざるときは、此等の女子を以て組織する家庭は自然乾燥冷凍ならざるを得ないであらう。現に予が知る一婦人の如きは、相當の學識を備へ、頗る交際に巧なるのみならず、娛樂は女子の嗜みなりとてなか〳〵の理想家である。牛乳の如きは、嬰兒に幾何の牛乳に幾何の湯を加へ、幾時間煮沸したる後何程與ふるが適度なりと云ふが如き事も能く研究して、下婢の如きも成るべく物の解かる女子を擇び、兒女の保育は殆どその下婢の手に託し、其他家政上の事も多くは下婢任せに打捨て、置いて、自分は交際上ノ關係より常に外出することが多い、其結果、育兒上の注意足らざる爲にや、世間の小兒は大抵夜泣するのが常であるが其家の小兒は晝泣をして困る、依て終に醫師の診察を求む

るに、至たさうだ。醫師の注意は言ふまでもなく學術上遺憾なきまでに行届いて居るであらうが、併し予はその母親が一週間外出せずして、親しく自身に乳を授け自ら種種の世話をして遣つたならば、醫師の治療を煩はさずとも、其兒の嘔泣は直に止まるであらうと思ふたが、遂にしばらく他出を見合せたところ果して速かに直つて仕舞つた。

子女を愛育するは親としての本務であるが、若し眞に其子を愛するならば、社交上の種々の關係などは、家事繁忙なりとて謝絶しても決して支障あるまい。何となれば女子殊に主婦としての職務は子女の養育保護が何よりも重要であつて交際の如きは寧ろ第二位に置くべきものであるからだ。然るに世間の婦人中には、不料簡にも往々子女の保育をば第二位に置きつゝ、交際の爲とか娛樂の爲とか云つてつまらぬ事に時間を費す人が多いやうだ。頃者ある新聞で、女子教育に就て論じて居つた。

たが、予は之を読んで一種の感想に打たるゝを禁じ得なかつた。予が少年の時、母の御伽噺しに聞きし所に依ると或人が極樂へ行つた所が、蓮の葉の上に耳と口とばかり澤山有つたゆゑ、不可思議に思つて何故かと問うて見ると、夫れは耳と口とが前世に於て善事をきゝ善事を云つた爲、耳と口だけ極樂へ來て居るが、靈魂と他の肢體とは惡事を働くしゆゑ、地獄へ行つたとの事であつたさうだ。この寓話と丁度同じに、現今の女子は、口と耳とが著しく發達して文明的であるけれども、他の行為に至りては之と相伴はない。理想だけは高尙にして間然すべき所なく家政學とか、衛生法とか能く種々の學藝に通じて居るが、併し翻つてその家庭の實況いかにと顧れば、朝寝もすれば、間食もするし趣味乏しき上に和樂を映き、その不規律なること實に言語に絶するばかりである。さるにても一度口を開けば尚ほ良妻賢母を稱へつゝ、議論の巧なることは敬服に堪へぬ程だ。方今の女

子は何故に四肢五管が齊一に働き得ぬであらうか
是れ世の女子教育家たる者の大に精査と奮闘とを
加ふべき所である。

我國の女子教育は年一年に進歩して、十年前と今
日との状態を比較するときは、其間に大懸隔ある
ことは言を俟たないが、併し予が世の女子教育家
に對して望む所は、現今之の女學生が将来人に嫁し
家庭生活を營む場合に臨んで、尙一層質朴に眞面
めに業務を執ることの出来るやうな人物に教育して
口と耳とのみが極樂に行けるやうな教育は避け、身體も精神も共に極樂に行けるやうな完全な
意志が薄弱である。是れ亦種々の弊害の生ずる源
に相違ない、一部の教育家は、一時西洋の所謂ス
ウキート、ホームなる語を標榜しつゝ、基督教の貞
節などは大に排斥し、千人に一人、萬人に一人も
なきものを模範として教へたりとて、何の效益な

しとし、女子の學業はスウキート、ホームを構成するを以て要訣と爲すべしと謂ひて、恰も蜜の如き甘き話のみを授けて教育したれば、此種の教育を享けたる女子は、少しも自己の志せる目的が齟齬するとか、又に夫が他の婦人にでも關係するとさは、堅忍勤苦以て夫の心を改悛せしむる事に力を盡さんとはせず、又其改悛するを俟たずに、往々妻の方より離縁を申し込むことあり、甚だしきは煩悶の末自殺するものなどもあるのだ。
又夫婦間の交情の如きも頗る研究すべきものである。今日の學生等より成立つ所の夫婦は一時は相互に撫でたり舐めたりする様に親しむも、若し一些少の波瀾が其間に生ずるときは、相互に忍容交譲して之を回復せんと努めることなく、直に泣いたり死んだりして騒ぎ廻はるのが多い、故に餘り善美を盡したる繪畫の如きスウキート、ホームを理想として女子を教育することは、其利害得失如何は大に審究を要すべきものと思ふ、今日の婦

人の多くは虚飾に逐はれ、空想を貴ぶ、魔慾の爲に煩悶するも、眞誠なる理想を抱きつゝ、或は女子の品性を向上せしむる事とか、或は婦人社會の風俗を矯正する事とか、若くは慈惠救濟の事業に盡すとかいふ様なことはまだ甚だ發達して居らぬ例へば遊廓設置問題の如きは、婦人界の問題としても、又政治上の問題としても、なか／＼若慮を加ふべき重大問題である。娼妓なるものは、一般女子と同性の人間たるに拘らず、文明進歩の今日尙純然たる奴隸的境遇に在りて苦んで居る。然れば成るべく之に同情を表して、以て漸次救濟の道を講じ、國家の品位を昂むることは、實に上中流社會の婦人の當然盡すべき義務であるのに、彼等は抑も何を考へ何を爲しつゝあるか、此等の重要な社會的事業に對しては何等の興味をも有せず些少の注意をも拂ふことなく、常に點々として之を看過して居るやうだ。是れ實に吾輩が其意を解するに苦しむ所である。

幼稚園の教育

左に記するは日本兒童研究會席上に於て本會主幹中村氏の講話せる大要なり

▲児童の活動児童研究を獨り教育家に專任とした時代は疾に過ぎて今日では心理學者醫師等の方面よりも各專門に之が研究を試み互に意見を披瀝した處で始めて完全なる兒童研究の基礎が成立つて云ふ次第である。夫れ故幼稚園教育の如きは兒童研究の結果を實地に應用するので昔の如く大人も兒童も同じ様に學術技藝を詰込む主義とは全然趣きを異にして居る實地兒童の教育に當つて見ると又其處には種々なる實驗も産れるもので先づ其の一を試みしと云ふ次第である。夫れ故幼稚園時代の兒童を觀察するに決して瞬間に活動を止めるものでない、爾うして活動するにも同じ遊びは必ず危急を生ずるものであるから其邊の呼吸は監督者の最も注意を拂ふべき事と思ふ

▲食事の改良幼稚園の課目と云ふのは唯今の處では遊戯を中心として夫れに音樂、お囃し、手業と云ふやうなものを兒童自然の性理に從つて教へる併し世間にては今の幼稚園は教育するためだと云ふもあれば、又幼稚園へ通はせる事は不賛成を唱へるものもあるけれど教育するためだと云へば何うしても小學校的になつて來るのは自然の勢だ左れば是等に對し改良を施さなければなるまいと思ふ一例を云へば食事をさせる時の如き小學校ならば兎も角幼稚園に於て机に並んだ體生徒各自背を向けて食べる事によふ事はない筈で之は矢張り家庭的に卓を團んで食事をする事に一般に改めたいのです又家庭的にする云つて何も校舎に聲を敷詰めずとも宜しからう要するに教師は母親の心になり外形にのみ重きを置くのは却つて宜しくなかろうと思ふ云々